

ぼちぼちいなか

「大人の科学」

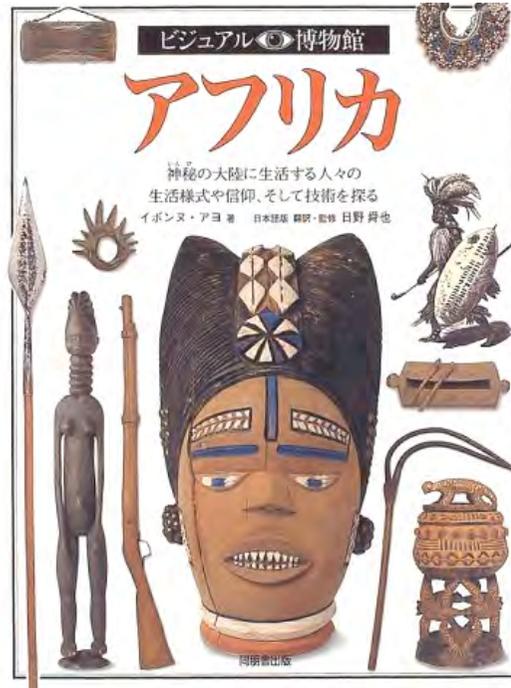
伴 勇貴

子供の頃は、「子供の科学」「初歩のラジオ」「模型とラジオ」などの月刊誌が発売されるのを心待ちにしていた。小学校の頃は「子供の科学」、中学校の頃は「初歩のラジオ」と「模型とラジオ」だった。「初歩のラジオ」「模型とラジオ」はすでに廃刊になっているけれど、「子供の科学」は、誠文堂（誠文堂新光社）から、今でも出版されている。

このたぐいのもので、僕が四十歳の頃、今から二十年以上前のこと、書店で見付けて感動し、発行されるたびに購入し、こつこつと揃えたのは、同朋舎出版の「ビジュアル博物館」というシリーズである。

これは面白かった。オリジナルは英国のドーリング・キンダストリ社で、その翻訳版であるが、翻訳を意識させない出来映えであった。「ビジュアル」という言葉の通り、ともかく写真と図版を豊富に使って歴史から自然科学まで理解させようと趣旨で制作されたものである。

その意図は十分に果たせたと思う。僕はときどきアットランダムに抜き出しては、飽きずに読むというか眺めていた。



生きているということ、そして人の縁とは不思議なもので、僕が「ビジュアル博物館」を買い求め、楽しむようになって数年後、その出版元の同朋舎出版の今田達社長と、知り合い、以降、ずっと懇意にさせてもらっている。そして嬉しいことに、その間に、まだ全部は購入していなかった「ビジュアル博物館」のシリーズをゴッソりいただいてしまった。今田達さんは、現在、同朋舎メディアプラン会長である。数十冊にもなる全シリーズはすでに僕から息子の手に移ってしまっている。数年も経つと孫が手にし始めるかもしれない。

こうした僕のような者を刺激するタイトル「大人の科学」という名前で、綴じ込みの模型キット付きの季刊誌が二〇〇三年、僕が五十八歳になった時に、誠文堂ではなく学研から発刊された。

本屋に一冊の厚さが五センチ近くもある本がうずたかく積み立てられているのを見て、思わず手にとって眺め、それが学研の出版であることを知って驚いたことが記憶に新しい。当初は年三冊のペースだったが、最近では年四冊ペースで出版され、すでに次の二十六冊が発行されている。

- ポンポン船ジェットボート (二〇〇三年四月)
- 探偵スパイセット (二〇〇三年七月)
- ピンホールカメラ現像セット (二〇〇三年十二月)
- 鉱石・ダイオード付きラジオセット (二〇〇四年四月)
- ロバート・フック式顕微鏡+プランクトン飼育セット (二〇〇四年七月)
- レコード盤録再蓄音機 (二〇〇四年十一月)
- 蒸気エンジン自動車 (二〇〇五年三月)
- 棒テンプ式機械時計 (二〇〇五年六月)
- 究極のピンホール式プラネタリウム (二〇〇五年九月)
- スターリングエンジン (二〇〇五年十二月)
- ニュートンの反射望遠鏡 (二〇〇六年三月)
- レオナルド・ダ・ヴィンチのヘリコプター (二〇〇六年六月)
- 投影式万華鏡 (二〇〇六年九月)
- ステレオピンホールカメラ (二〇〇六年十二月)
- 紙フィルム映写機 (二〇〇七年三月)
- ミニ茶運び人形 (二〇〇七年七月)
- 世界最古の電子楽器 テルミン (二〇〇七年九月)

文字提供：字游工房

- 風力発電キット (二〇〇七年十二月)
- ガリレオの望遠鏡 (二〇〇八年三月)
- 手回し鳥オルガン (二〇〇八年六月)
- 電磁石エンジン (二〇〇八年九月)
- 平賀源内のエレキテル (二〇〇八年十二月)
- ポールセンの針金録音機 (二〇〇九年三月)
- 4ビット・マイコン (二〇〇九年六月)
- 35mm 二眼レフカメラ (二〇〇九年十月)
- アンプ・スピーカー内蔵 ミニエレキ (二〇〇九年十二月)

各号のテーマそのものは、かつて「子供の科学」に登場したようなもので、それが僕に一層の郷愁を呼び起こす。しかも綴じ込みの模型キットは厚さ五センチあまりの立派な箱に納められており、普通の「付録」や「おまけ」とは違う、「大人の科学」である、「子供の科学」とはひと味違う、と自慢げに主張しているように見える。

しかし、「お遊び」に過ぎないことは値段を見れば明白である。作り上げるまでが楽しみで、作り上げてしまったらゴミになる運命であることも分かっている。それでも、本屋で手にすると、無性に綴じ込みの厚さ五センチあまりの模型キットの箱の中身を見たくなってしまう。「ようし、作るぞ!」と思ってしまう。

かつては、その衝動に突き動かされ、小遣いをはたいて買ってしまったものだった。そんな子供時代の学習効果から、今は直ちに買い求めることはない。一回目の出会



いで買うようなことはない。ともかく、まずは買わないで本屋を出る。少なくとも数日間は迷うようになっていく。

それでもついつい「大人の科学」を買ってしまった。発行以来、計三冊も買った。

八号「棒テンプレート式機械時計」(二〇〇五年六月)

十号「スターリングエンジン」(二〇〇五年十二月)

十三号「投影式万華鏡」(二〇〇六年九月)

しかし、買っても模型キットの箱を開けないでいた。中を見て、やっぱり「お遊び」に過ぎずゴミになるのが確実だとガツカリするのが怖くて、ただ箱を眺め、いつか開けて作ろうと思うだけで満足していた。

ところが気が付いたら最後に買った「投影式万華鏡」の箱が開けられ、組み立てられていた。買ってから間もない二〇〇六年十月のことである。

麻布に住んでいた頃、散歩の途中、麻布十番で見付けたオープンしたばかりの「カレイドスコープむかし館」で迷いに迷った末に約二万円もの大枚をはたいて「万華鏡」を買った。一九九五年頃のことだ。

これを契機に、著名な作者の多いアメリカでも専門店を見つけ、品定めを行い、そして日本よ



りも三〜四割ぐらい安いことに興奮し、「万華鏡」を何点も購入したので、一定の鑑識眼は持っていると思自負している。

その眼で眺めると、組み上がっていた「投影式万華鏡」はまるで縁日の景品のようなものだった。それをきつかけに全部開いて、サカサカと作ってしまった。

数日眺めていたけれど、鬱陶しいので捨ててしまった。

それから三年以上経った。相変わらず「大人の科学」を書店で目にする。最新のものは昨年未の「アンプ+スピーカー内蔵ミニエレキ」だ。

本屋で「大人の科学」うずたかく積まれていると、まだ思わず本屋で手にとってしまうが、眺めるだけで我慢するようになっていく。

(二〇一〇年 初春)

